『広島平和科学』21 (1998)　pp. 273-301　ISSN0386-3565
Hiroshima Peace Science 21 (1998)

戦争責任と原爆をめぐって：現代日本における議論と平和博物館の役割

ダニエル・セルツ
広島大学大学院国際協力研究科研究生
松尾雅嗣
広島大学平和科学研究センター

Discussing War Responsibility and the Atomic Bomb: Public Discourse and Peace Museums in Contemporary Japan

Daniel SELTZ
Research Student, Graduate School of
International Development and Cooperation, Hiroshima University
Masatsugu MATSUO
Institute for Peace Science, Hiroshima University

戦後日本における戦争をめぐる言説と博物館の役割

第二次世界大戦終戦50周年の1995年は，太平洋の両側においてこの戦争の原因と，教訓と，遺産とについて激しい議論の起こった年でもあった。なかでもスミソニアン博物館のエノラ・ゲイ展示をめぐる論争がこの年最も注目を集めた論争であることは確かだが，戦時に溯る戦争の記憶ををめぐる未解決の諸問題は，日本の側にも重くのしかっかていた。過去50年の間，日本人は，日本軍の残虐行為の「発見」から教科書の検定，博物館や記念館における公的な慰霊の形態に至る単発的議論と論争を通して，この戦争の歴史と遺産に向かい合ってきた。この戦争から如何なる教訓を導き出すことができ，それを国民にどのような形で伝えるかに関して，公的組織は合意に達することができないでいる。これら戦争の教訓を協議し，検討する有効な枠組すら今日に至るまでないのである。戦争の性格と，原爆と，戦争責任とをめぐる議論の枠組と用語は，単発的な議論の蓄積によって固定されてしまった。その結果右翼と左翼が二極分離してしまった。右翼は，彼らの信ずる自衛と反植民地主義の戦争で命を失った人々の犠牲を強調することに傾き，戦争における天皇の役割から関心を逸らす。彼ら保守派は戦争を論ずるときしばしば宗教的，疑似宗教的修辞を使用する。これに対して，左翼はアジアの人々の苦難に対する日本の罪を強調することに傾き，国内日本人の苦難の記憶を反軍国主義政策の継続に対する支持の結集のために利用することを試みる。この論争のいずれの陣営にとっても，広島と長崎の記憶は中核的位置を占めている。

日本における戦争の記憶に関する言説は限られた用語と枠組の中に閉じ込められている。今や，戦争に関してこの用語と枠組の狭い境界を越えて議論することはますます困難になっている。政治家も歴史家もこれらの用語を組替えて，限定された聴衆と支持者を超えた人々に訴えることができないでいるのである。しかし，博物館は戦争について広範な論議を生み出すために重要な役割を果たすことができるはずである。この意味では，広島の平和記念公園と資料館は，戦争の議論において博物館間が占める位置を考えるとき格別の注目に値する。蓋し，それは，聖なる雰囲気の醸成と原爆の歴史論議からの超越を達成することによって，戦争と原爆に関する新たな広範な議論（と，望むらくは共通の理解）の場を提供する機会を失った事

例だからである。勿論，日本には新たな平和博物館も生まれており，戦争と平和についてより自省的でまたより直接に教育を意図したアプローチによって，広島の平和公園と資料館に反映されている硬直的な議論の枠組を超えはじめている。

過去50年間，1931年から1945年までの戦争の記憶は日本の政治と社会に長い影を投げかけてきた。憲法の問題も日米安保体制の問題もその例であり，日本の指導者の象徴的な謝罪の行為や言葉もその例である。国内政治の外の要因もまた戦争がどのように記憶されるかに影響を及ぼしてきた。1960年代から教科書検定問題で文部省と戦ってきた家永三郎の歴史家個人の使命感による奮闘もあれば，経済発展のような大局的現象もある。この戦争に対する国民の態度にどのような影響を与えてきたかを個別事象に即して正確に確定することはほぼ不可能に近い。しかし，戦後の各時期それぞれに，異なった理由と影響をもつ重要な出来事があり，新たな戦争の解釈を提起してきた。あるいは時代の関心を集めた出来事に関する議論が戦争の問題に跳ね返り，何らかの歴史的再検討を促してきた。

日本において，第二次世界大戦をどう理解するかの論争は降伏の直後から始まったが，この時期の議論は米国の政策的要請に大きく影響された。この時期は，突然のトラウマのような転換を特徴とする。日本人は突然の歴史の断絶に対処しなければならなかったからである。そしてこの断絶は，グラック（Carol Gluck）の指摘するように，「個々人の精神の中においては相当に不安定な存在であった」。なぜなら，グラックの言葉を借りれば，すべての日本人がそれぞれに，「8月15日以前と以後とでしばしば何ら明らかな内面的差異を示さない個人的な体験にもとづいて，過去と現在をひとつに織り上げることを余儀なくされた」[1]からである。占領軍による検閲の実施も，日本人の被害の生々しい描写を禁じるなど，日本人読者に提供さるべき内容を細かに統制することによって，日本のメディアにおいて戦争に関する包括的な検討が行われるのを人為的に遅らせることになった。東京裁判もまた，慎重に選別した悪役と明快な結末をもって戦争を簡明な物語に纏め上げる試みであった。東京裁判は，米国押し付けの半植民地主義的な戦争史観を採ることの危険を示す基準として，また実例として，後に右派によって頻繁に引照されることとなる。ソ連に対する防壁としての日本の強化と再軍備への占領政策の転換もまた，1940年代から50年代前半にかけて戦争に関する包括的な反省の可能性を減ずるもの

であった。

戦争責任に関する日本国内の議論に予め枠をはめるという，日本の協力による米国の努力は，戦争を再検討すべき本来的な枠組や場が戦後日本においては存在しえないことも意味した。例えば，セオドア・クック（Theodore Cook）とハルヨ・クック（Haruyo Cook）は，先の戦争に関する包括的体系的議論は日本では実際には一度として行われなかったと述べる。「なぜ敗戦がもたらされたかを広く国民の間で究明したり，戦争の多面性と恐ろしさを協力して徹底的に理解するどころか，日本は，この戦争に関して広範な教訓や結論はひとつとして引き出していないし，真の国民的議論を行なったこともない。ひとりひとりの日本人が，あの戦争の歳月の記憶を維持するために死者を忘却しないという義務を，個人として負わされているのである」[2]。彼らの言う「戦争体験の集団的な検証と考察のための中立的な公の場」を欠くゆえに，国民の記憶は，多分に実体をもたぬままであり，明確な定義と表現を欠いた個人的記憶の総体にとどまっているのである。

1950年代に入り，日本で平和運動と原水禁運動が開始された。運動のそれぞれが戦争の記憶を支持結集の論点として援用した。学者と知識人の集まりである平和問題談話会は，戦争と平和と国際社会における日本の地位に関して何度か声明を発表していいたが，1950年に広く話題を呼んだ声明「三たび平和について」を公表した。この声明は，ダワー（John Dower）の指摘するように，「先の戦争における日本人の苦難に直接に訴えることによって戦争反対の感情を醸成しよう」[3]とするものであった。1954年には，ビキニ環礁の米国水爆実験による日本漁船の被爆が，反核運動の強力な動因となった。この運動もまた，核兵器反対のために広島と長崎の記憶に訴えた。戦争における苦難の記憶を政治意識形成の核として利用する，所謂「被害者意識」は，1960年の日米安保条約改定に反対する大衆抗議行動においても重要な役割を果たすことになる。かくして，戦争の記憶とこのような運動を媒介として，安定した恒常的な政治運動が誕生したのである。そしてこの運動は，日本の軍事費の増大と軍事化に歯止めをかける役割を果たしつづけるのである[4]。

この時期雑誌『中央公論』に発表された林房雄の「大東亜戦争肯定論」は，保守派が戦前戦中の日本の行動を擁護するために使用する議論の基本的枠組を大半設定するものであった。林は，日本のアジア「進出」は，世界不況と迫り来る西欧植民

地列強という圧力のただ中で資源を確保するための止むに止まれぬ行為であったと論ずる。そして彼は，戦争の現実の結果がアジアにおける西欧植民地主義の終焉であったことを強調する[5]。続いて，ベトナム戦争と日本がそこから得た経済的利益も，日本国民の意識の中に新たな戦争の問題を突き刺した。1960年代の高度経済成長と技術的優位の拡大は，日本をぎこちない指導的な国際的地位に再び押し戻した。歴史家家永三郎が，文部省を相手取って以後30年以上も続く教科書検定訴訟を起こしたのは1965年である。

1980年代にも，第二次世界大戦の解釈と記憶をめぐって論争が行われた。第一に，日本軍のアジア諸国への侵攻を記述する教科書の表現を「侵略」ではなく「進出」に変更するという1982年の文部省の決定が，中国と東南アジアの指導者の激しい抗議を呼び起こした。中曽根康弘首相の靖国神社公式参拝復活の試み（アジアからの抗議の嵐に遭いこれは撤回された）や彼の言葉によれば「普通の国」になるための防衛費増強の政策などは，戦争を遠い過去に押しやり日本にとっての新たな時代の到来を宣言する意図的試みの一環であった[6]。同時に，泰緬鉄道建設時の捕虜虐待，731部隊における生物兵器開発のための生体実験，従軍慰安婦など新たな問題の出現はマスメディアが戦争の問題を再度取り上げざるを得ない衝撃をもっていた[7]。1989年の昭和天皇の死と，天皇の一定の戦争責任を認めた本島等長崎市長の暗殺未遂もまた戦争の記憶と責任の問題に関する論争を促すものであった[8]。

1990年代に入り戦後50周年が近づくにつれ，戦争の記憶の問題は一層激しい争点となった。湾岸戦争と日本が何らかの形でこの戦争に貢献すべきであるという米国の主張は，自衛隊の海外派遣をめぐる憲法問題を前面に押し出し，国際安全保障における日本の役割に関して，1940年代後半に溯る左右の見解の対立を浮き彫りにした[9]。東京に国立戦争博物館を建設し，その業務を保守的な遺族会に委託するという政府の提案と計画は，日本人以外の人々の苦難を示す展示がほぼ皆無であるとして抗議を呼び起こした[10]。50周年の1995年には，戦争に関して膨大な数の出版物，記録映画，新聞雑誌記事，テレビ特別番組が生まれたが，その多くは天皇と戦中の日本政府に対して相当に批判的であった[11]。このブームは，戦争に関わる多くの問題を表に出すことはできたが，政治の領域において戦争に関する合意を形成する助けにはならなかった。1995年，国会は，日本の戦争中の行為の犠牲者に対して曖昧

な謝罪決議を採択した。この決議は，国際的な注目を集めたが，成立に至る過程での多くの妥協と言い換えを考慮すると究極的には功よりも罪のほうが大きかったかもしれない[12]。

この決議は，1990年代半ばという文脈で行われたのであるが，この時期には一定の論争のパターンが出現していた。博物館の設立に関してであれ，教科書の改定に関してであれ，天皇の戦争責任に関してであれ，謝罪決議に関してであれ，右翼勢力は，日本のアジア進出は世界恐慌と西欧植民地主義列強の圧力の下で資源を確保するためのやむを得ぬ行動であったとして，1930年代の世界政治の性格を強調しつづけるとともに，この戦争がアジアにおける西欧植民地主義の終焉を現にもたらしたことを指摘しつづけてきた。彼らの議論には，しばしばナショナリスティックな趣きが付きまとっている。彼らと主張を異にする人々は，しばしば，相も変わらぬ米国の召し使いであるとして，あるいは自虐史観，「東京裁判史観」の支持者であるとして非難されるのである。多くの自由民主党員と遺族会の指導者を含む保守派は，かの戦争を「侵略戦争」と呼ぶことは，旧軍人とその家族の名誉を汚し，彼らの死が無意味であった，所謂犬死にであったと言うに等しいと主張する。油井大三郎はこの「犬死に論」のもつ意味合いを分析して，「犬死に論は将来の戦争に備える心理的基盤であり，勝利のみが戦死を真に意味あるものとする唯一の道である」と述べている[13]。右翼の主張のもうひとつの特徴は，宗教的あるいは疑似宗教的修辞への依存である。ハモンド（Ellen Hammond）は，日本人が「死者とともに生きること」を靖国神社公式参拝の論拠とした江藤淳をこの一例として引き，右翼は「歴史的分析を不可能にするための特製の非合理」レトリックを援用すると説明している[14]。

とはいえ，国民の反省という曖昧模糊とした訴えによりかかりすぎた左翼の議論も冷静な歴史的分析を促す役割を果たしてきたわけではない[15]。粟屋憲太郎は，1991年に，「国際社会における日本の将来は，20世紀前半の諸事件について日本人が如何に広範にかつ真剣に自己反省をするかにかかっていると信ずる」と述べている[16]。最近では岡本三夫が，原爆ドームのユネスコ世界遺産登録に際して「日本人は広島の悲劇に先立つ歴史的背景を真摯に反省し学ばなければならない」と述べている[17]。世代，階級，性の異なる現代日本人を一枚岩として論ずるという問題は措

くとしても，このような言葉を読むとき全国民が如何にして「反省する」のかという疑問を禁じ得ない。チョムスキー（Noam Chomsky）は，かつて「我々アメリカ人がドイツ人の良心のなさを嘆くとき，我々は彼らに自己嫌悪の表明を要求しているのである」と書いたが[18]，これこそ粟屋や岡本らの論者が求めているものであり，国家の指導者に求めるものとしては異例のものなのである。しかし，罪を認めることを強調することが，明確な目的をもって行われることも少なくはない。例えば，立命館大学の平和ミュージアムの館長として戦時下の日本に対してきわめて批判的な展示を設計した安斎育郎は，このように自らの罪を率直に認めることは，第一義的には広島と長崎への原爆投下を非難する信頼性を高めるために必要なのであると述べている[19]。戦争の記憶に関する言説において右翼と左翼に共通するのは，この原爆被害の強調である。右翼はそれを残虐行為を隠蔽するために使い，左翼は反軍国主義運動の強力なシンボルとして使う。この論理の欠陥は，安斎のような人の手を離れると，あまりにも容易に素朴な歴史的「目には目を」論と化してしまうことである。このとき，パールハーバーは広島と長崎を相殺し，広島と長崎は南京大虐殺を相殺してしまう。

左翼の側に立つ専門の歴史家達も一般大衆に対して戦争と戦争責任の新たな解釈を提供するには力がなかった。ボズワース（R. J. B. Bosworth）は，戦争に関する歴史記述は「聞く耳をもたぬもの同士の対話」を一度も出なかったと評している。日教組のような左翼集団は一貫して戦争の批判的検討の必要を唱えてきてはいるが，左翼集団も同じ立場の専門の歴史家たちも一般大衆に効果的な話りかけができないでいる。ボズワースによれば，「マルクス主義歴史家は［他陣営に対する］同業者組合的で恒久的な敵対関係から一歩も出られぬ運命にあったのである」[20]。これに加えて，天皇と天皇制の変わらぬ存在は戦争責任の再検討をきわめて論争的なものにし続けている。グラックは天皇を近代日本における－常に存在するが姿の見えぬ－「歴史の宴席の亡霊」であるとし[21]，ハモンドは，戦争責任の議論から天皇を除外したことが日本のアジア侵略に関する歴史的議論を「左翼対右翼という旧来の構造」に押し戻してしまったと指摘している[22]。

政府の公式発言も，思慮深い過去の再検討よりもむしろ対立を惹き起こすものであった。米国で報道されることは少ないが，1950年代の吉田茂以降の日本政府指導

者は，戦争中アジアに与えた苦難について何度も認識と謝罪を繰り返してきた。しかし，首相の声明や議会の反省決議が，心の底からの反省というよりは，国際政治と国際市場における日本の地位への関心を動機とする不誠実なものであると，しばしば正確に，認識されていることは今や明らかである。今日の日本における政治に対する広範な不信は，このような謝罪と「認識」が戦争責任と戦争の記憶について直ちにカタルシスと治癒をもたらすことは決してないこと，そして日本の一部の層を代表するにすぎないと見なされつづけるであろうことを意味する。戦争責任の論争に用いられる言葉は余りに使い古され常套化しており，ほとんど無意味に近くなってしまった。ラパム（Lewis Lapham）は，体験に関して既に記録済の言語と既成の常套句を使うほかに道がないとき，シュールリアリズム的非現実性を免れた何らかの意味を過去から救出することがいかにして可能であろうかと，論じている[23]。日本でも，パール・ハーバーから南京，広島，長崎に至るまで地名は苦難と同義であり，いかがわしい同義性をもった常套句と化し，歴史の複雑さを捨象されて使用される。それゆえにこそこの問題は深刻なのである。

歴史学が二極化した左右対立的な戦争に関する言説を繰り返し反映するにとどまり，政府の指導者も常套的な修辞の枠組を脱出できない状況の下で，既存の博物館は，このような硬直的で固定的な事態を打開するため重要な役割を果たすことができる。博物館は，伝統的には，戦争責任の再検討に関わることには乗り気でなかった。しかし，歴史博物館は，戦争の記憶に関してより前向きの役割を引き受け，ただひとつの戦争理解を公式化し他のすべての解釈の上位に置くという偏りを避けることができるはずである。博物館の最善の役割は，よき教師であること，つまり「終わることのない対話」[24]としての自由主義的な学術的歴史モデルを受け入れることである。直ちにはカタルシスを提供できないとしても，博物館は戦争に関する議論の幅を広げる一助となることはできる。

以上述べた観点から，以下，日本の平和博物館の幾つかを検討するが，原爆が戦争の解釈における重要な位置を占めることからして，広島の平和祈念公園と資料館が戦争と原爆をどのように扱っているかを検討することから始めるのが適当であろう。

広島：不安定な合意としての記憶

広島の平和記念公園と資料館は，市の復興計画の一貫として1955年に建設された。今日に至るまで国家の資金援助を導入しない純然たる市営の博物館である。平和公園は毎年の平和祈念式典の会場であり，広島平和文化センターもここにある。平和文化センターは，平和教育と原爆に関する出版物を刊行し，原爆関連の多くの行事を企画している。しかし，資料館それ自体は，年間約150万人（およそ3分の1が生徒である）の見学者を受け入れるだけで，広島の市民向けの業務はほとんど行っていない。戦争に関わる日本のすべての博物館の例に漏れず，広島の資料館も資料の展示と説明に際して相異なる関心の均衡を図らなくてはならない。平和公園と資料館は，広島の公式な戦争の記憶の場として，文字どおり特別の場所に位置する。そしてそれゆえに，原爆投下と被災の問題に固有の，特別の矛盾と緊張に直面せざるを得ないのである。

その第一は，公的なるものと私的なるものの間の緊張関係である。資料館の第一義的目的は個人に固有の経験を伝えることであろうか，それとも，依然として未解決の核の問題に関わる集団的な政治的関心の推進に資することであろうか。第二に，平和公園と資料館は，ときに表現不可能と言われるものを表現するという難問に直面せざるをえない。最後に，平和公園と資料館は祈りの場であるべきか歴史教育の場であるべきかという絶えざる対立がある。この対立はしばしば慰霊と運動，記憶と歴史の対立とも称される。結局のところ，広島においては，慰霊が学習に優先する。資料館は，歴史的な分析や批評の場というよりは祈りの場という雰囲気を感じさせる。同時にあまりに多くのものであろうしために，誰も傷つけることのない場所であろうとしたために，資料館は，歴史をめぐる論争の硬直的な言説を丸ごと飲み込んで動きの取れなくなった博物館の実例となってしまい，新たな視点の出現を促したり，議論の機会を提供することができないでいる。

平和公園と資料館は，原爆の特殊性の主張に関して左翼と右翼の合意しうる場となり得ている。しかし，この特殊性は，それぞれの陣営で大いに異なる用途に供されている。右翼も左翼も原爆の未曾有の破壊力と広島と長崎の人々が被った新たな形態の被害を強調する。両者ともに，このふたつの都市の経験が日本全体を代表す

るかのように原爆被害を一般化する。右翼は，原爆被害の記憶を戦前戦中の国内的抑圧と国外の残虐行為を隠蔽するために利用し，このような行為は原爆によって相殺されると主張する。左翼は，原爆被害の記憶を戦中の植民地主義に異議を唱え批判するのために利用する。そして，日本の再軍備と，憲法9条の誤った解釈と，国内米軍基地の存在に反対する掛け声として利用する[25]。原爆被害は日本に永続的平和運動を生み出し，平和運動は戦後の防衛費に有効な歯止めをかけた政治的基盤となったと，フック（Glenn Hook）は論じている[26]。

資料館には，東館から入る。東館は，広島の戦前の歴史の扱いを充実するため，1994年に改修増築された。この展示の充実は広島では大きな議論を呼んだが，エノラ・ゲイの展示に関する論争と比べ物にならないし，長崎の新しい原爆資料館に関する論争とすら比べ物にはならない。1994年以前には，資料館の展示は原爆の爆発の瞬間で始まっており，原爆投下に至る出来事の背景はまったくと言っていいほど展示されていなかった。スクリーンの映像が資料館の目的を紹介し，1945年8月6日広島に原爆が「投下され」，多数の市民が亡くなったと述べる。この主語を欠いた受け身の表現は資料館の至るところに溢れている。原爆を「投下した」のが米国の軍隊であることを知るためにはよほど注意してみなければならない。画面の映像は死者のうちには，強制的に徴用された朝鮮人と中国人の労働者もいたことを付け加える。スクリーンの映像はこれに続いて資料館の普遍主義的な使命を伝える。「人類は核兵器の恐怖から決して逃れられないであろう。核兵器は人類の存在そのものを脅かしているのである」とスクリーンは語る。広島は，この恐怖の中にあって希望の灯たらんとする。曰く，「人類の運命のかかったこのとき，広島で世界の人々の連帯を築く競争が始まったのである」と。資料館は，「世界平和と核兵器の全面廃絶への我々の希求の表現である」。しかし，資料館の主目的が明らかになるのは，「1945年8月6日広島でいったい何が起こったのであろうか」とスクリーンの声が問い掛けるときである。この観点の狭さにいかに問題があろうとも，これは正直な言明である。これを聞けば，資料館が原爆投下当日をはるかに超えた出来事を包括的に扱っているという期待は何人も抱かないであろう。

最初の部屋は，主として原爆投下までの広島の歴史を大部分写真と説明文によって，扱っている。最初のセクションのパネル展示は，日清戦争に始まり日本の大陸

進出とともに強まっていく，海港から軍事生産拠点への広島の変容を伝える。この部分は毒にも薬にもならない，かなり退屈である。1930年代になるまで，写真と文章のほかには展示品もない。太平洋戦争開戦の説明も，どんなに誉めてもせいぜいぞんざいとしか言えない。しかしながら，軍都広島に関するこのセクションは，資料館の以前の展示を明らかに超えるものである。入り口での日本人以外の原爆犠牲者への特別の言及とともに，このセクションは，広島における伝統的な理解，無辜の被害者という理解，に対する挑戦だからである。ここでは，些か過大な表現とも思える「加害者」展示という言葉が一貫して使われている。勿論，日本人の罪を直接に表現したパネルもある。南京大虐殺のパネルは，日本軍によって殺害された中国人の数は推定に幅があるとは述べているが，軍の行動が野蛮で残虐であったことに誤解の余地はない。戦争中の国内の苦難も多いに強調されているが，この苦難をもたらした人々，食糧の配給と徴発に至る意思決定をした人々が誰であるかを知るのは難しい。時折意思決定者としての「政府」への言及はあるが，ここでも受身形の使用が支配的である。部屋の中央のスクリーンには主語を現実に明示した説明もついているが，「1945年8月6日，アメリカ軍は…」とあるだけで，中途で途切れている。

原爆投下に関するふたつの最も重要な歴史的問題についてのこのセクションの扱いは不十分である。しかも，説明文が「原爆はなぜ広島に投下されたのか」と主語を欠いた受身で設問しているためさらに効果が削がれる。理由として，主語の意図が挙げられていることを考えれば誤訳というべきか。曰く，原爆投下は，多くの人命を救うため，ソ連に対する戦後の米国の地位を強化するため，実戦における原爆の効果を知るためである等々と。次の説明文は，「なぜ広島か」と尋ねて，広島の規模と地形が投下に適していたからであり，それまで爆撃を免れていたので効果の測定が容易であったからであると答える。加えて，軍の人員，施設，工場が広島に集中していたことも指摘されている。このふたつの重要なパネルには何の展示品もない。

次の展示は，明らかに情緒的なものに転換する。原爆投下の時刻を指したまま止まったぼろぼろの時計がひとつだけ展示されていることがこれを象徴する。原民喜の詩『コレガ人間ナノデス』が，「原爆の真実」という題のもとに掲げられてい

る。そして説明文は，広島は，原爆投下とともに，単なる都市ではなくなり，平和とそして平和への希求の普遍的象徴となったと述べる。これに続いて「新兵器」が原子爆弾であることが理解されるまでの人々の反応が手短に語られ，放射線の影響について予備的な説明が与えられる。映像はここで，熱線と消えることのない放射線の後遺症の故に，原爆は，通常兵器と質的に異なるものであることをを淡々と伝える。これは，挫折したエノラ・ゲイ展示の原案においても，スミソニアン航空宇宙博物館には，疑問としてすら提起できなかったことである。映像は幼児と死体から焦点を離さない。近年になって漸く死体の写真を展示したスミソニアン博物館では考えられないことである。このセクションは，日本の降伏に言及し，1968年以降のすべての核実験に対する当該国の指導者に宛てた広島市長の抗議文の効果的な展示で完結する。

2階は，広島市の復興の歩みを扱っている。住居と都市基盤復興の困難，闇市の隆盛，間に合わせの青空教室などが語られる。この部屋の説明には，原爆の生々しい描写を禁じた占領軍の検閲政策の説明や，占領軍当局が1950年から53年まで平和祭の開催を禁じたこと[27]も含まれている。海外被爆者に関するパネルもあり，日韓の協力により在韓被爆者のための診療所が開設されたことも述べられている。これは，医療や手当ての給付の不平等や韓国人犠牲者の慰霊碑の設置場所をめぐってとげとげしかった韓国人被爆者との関係について[28]，資料館が語ることのできる数少ない明るい話題の一つである。

さらにもう一度階段を上ると，原子力の矛盾と遺産を扱う部屋である。原子力の原理，核実験の歴史，抑止論，原子力の環境への危険についての明快な説明がある。照明は他の部屋に比べて明るく，説明もより学問的で感情を抑制してはあるが，スクリーンの荘重な音楽はまだかすかに聞こえており，映像や写真やパネルで原水爆の爆発を見ることは厳粛な雰囲気に寄与する。この部屋もまた普遍主義的なテーマの部屋であり，核兵器を個別の国家に対する脅威ではなく，世界全体への脅威であると主張する。

とはいえ，資料館はやはり広島の資料館である。広島の人々が主題であり，また語り手であることは最後のセクションで明らかである。東館の最後の展示セクションは，平和を核兵器の廃絶より広い概念として定義する資料館の唯一のセクション

である。「しかし，我々は核兵器が戦争の産物であることを決して忘れてはならない」と説明文の一つは言う。「日本もまた，植民地主義政策と侵略戦争により，多くの国の人々にはかりしれない，取り返しのつかない被害を及ぼした。我々は，核兵器だけでなく，戦争と戦争の原因にも思いを致さねばならない。戦争への道を見極め，それを避けるために，歴史の教訓を学ばねばならない」と。教科書に関する部分もあり，「相互の苦難を将来のための建設的な贈り物にする」ために力を尽くさねばならないと述べられている。原爆の「物言わぬの証人」としての，広島に残る被爆建造物の重要性も語られている。東館の最後の展示は，国際会議や原水禁大会の招致，展示品の海外貸出，平和研究の推進といった広島の国際化への努力を伝える。

以前からの展示品を陳列する西館は，東館とロビーと廊下によって隔てられおり，別個の博物館という印象を与える。西館は，ほとんどすべて原爆投下の日の被害の展示に当てられている。東館に比べ，はるかに直裁であり，はるかに恐ろしい。しかも衝撃を与えることを意図したものである。入り口は暗いホールであり，周囲に人口の炎が灯されている。角を曲がると皮膚の垂れ下がった蠟人形に出会う。物理的破壊を示す様々な陳列物とともに，母親の保管していた息子の爪，8時15分で止まった時計，学校の制服といった遺品が展示され，耐え難いまでに強烈な人間的効果を与えている。この身の毛のよだつセクションの最後に，放射線の消えることのない後遺症と被爆者医療の難しさが要約されている。被爆者の回想証言ビデオもある。

広島における対立と矛盾

平和記念公園と原爆資料館の展示における歴史的文脈の欠如や他の欠点を批判することは比較的容易なことである。しかしながら，資料館の戦争原因と後の展開の扱いの不備や，説明の中での少数民族の周辺的な扱いを難詰することよりも，戦争の記憶に関わる政治というより広い文脈における資料館の位置と，資料館が原爆被害の公式の記念物として直面せざるを得なかった様々のジレンマと対立を認識することのほうがより重要な問題である。ダワーが述べているように，「広島と長崎に

関する人々の記憶の特徴は，周期的な更新，別の言葉で言えば，個人や草の根の運動が戦争と原爆の記憶の儀式化や粗野な政治化に反対するという形での再人間化の周期を経てきたことであると言える」[29]からである。若い女性の縁談をテーマとして一家族の常態への復帰の努力を綴った井伏鱒二の1967年の小説『黒い雨』はこの反応の一つの例である。作者は毎年の平和祭が個人の体験を希薄化すると考え，きわめて個人的で日常的な努力をこの作品のテーマに選ぶことによってそれを防ぐことを望んだのである。登場人物の一人が憤慨するように，「みんなが忘れとる。あのときの焦熱地獄－あれを忘れて，何がこのごろ，あの原爆記念の大会じゃ。あのお祭騒ぎが，わしゃあ情けない」[30]からである。

原爆の記憶に関する平和記念公園と原爆資料館の役割は，個人の記憶と原爆の記憶の集団的利用とのこのような動的な対抗関係の中で評価しなければならない。資料館の展示は何人かの個人的体験を語っているし，上述のような個人の側面を無視することはめったにない。実際，西館のほとんどすべての展示品には個人の名前がついており，そのことが，原爆投下とその意味は広島という都市の破壊としてではなく，何万という人々の個別の個人的な苦難として理解さるべきであるというメッセージを強めている。原爆は，一つの体験ではなく，何万という異なった体験なのである。資料館の最後のコーナーで被爆者の回想を伝える証言ビデオもまた，資料館における個人的なるものの重要性を示唆する。

この個人的なるものへのこだわり，犠牲者の悲劇的な経験の細部へのこだわりは，多くの点でまったく妥当なものである。戦後の占領軍の検閲から，原爆のもたらした人間的苦しみを示すいかなる展示品も写真も陳列していない，今日のワシントンDCのエノラ・ゲイ展に至る伝統は，原爆投下の人間的側面から注意を逸らしてきたが，このこだわりは，このような多くの力に対抗する効果的な矯正力をもっている。丸木位里・俊夫妻は原爆被害の一連の壁画を描いているが，描かれているの周囲の風景ではなく人間である。丸木俊は，「わずかに伝わってくる原爆の情報は，何キロ四方が焼けたか，建物や家屋がどうなったか，コンクリートの橋がどのように破壊されたかだけであった。ただ一つ大事なことである，広島の人々に身の上に何が起こったのかについてはほとんど何も伝えられなかった」と回想している[31]。原爆をめぐる日米の歴史論争において，両国における原爆投下の公式解釈に

おいて，あるいは反核運動においてすら，被爆者の個人的体験がどのように希薄化されてきたかに関する，この丸木俊の指摘は正しい。原爆資料館はこの動きを匡そうとしているのである。

これに対して，平和公園自体は，多数の慰霊碑とともに，個人の体験を超えて，被爆者の体験を世界と結び付けようとするものである。資料館が被爆者の個人的体験を語る個別主義的なものであるのに対して，平和公園は普遍的な平和への願いを表現しようとする。この意図がどれほど称賛に値するものであるとしても，平和公園と慰霊碑は，資料館の個人的人間的なものへのこだわりから一歩遠ざかるものである。それは，被爆者の体験を記録することとは異なる目的のために体験を利用する最初の第一歩である。事実，平和公園の図像学的構成は，水，即ち原爆の犠牲者たちの経験した恐ろしい渇きを象徴する入り口の噴水から，火，即ち世界平和が達成されるまで燃えつづける永遠の火に至るという構造になっている。これは，被爆者個々人の体験や記憶から一歩離れたものである。記念碑と慰霊碑も無名である。記念碑も慰霊碑も何かを語りはするが，見る者は自身でそれを定義し意味づけなければならない。原爆慰霊碑には「安らかに眠って下さい。過ちは繰返しませぬから」とあるが，誰の過ちなのか，どんな過ちなのか，日本軍国主義のことなのか，原爆の使用のことなのかについては何も語らない。スターケン（Marita Sturken）は，個々の兵士の身体の傷は実体を有する記録であり，一種の戦争の記念物であるが，その治癒の過程が「国民全体のものとして語られるとき，個々人の肉体は捨象され，個々人の傷は国民全体の治癒のなかに包摂され見失われる」[32]と書いている。

個人の苦痛と回復の語彙を国民と国際社会の言説に借用すること，即ちダワーと井伏の述べた儀式化とそれに対する反応を，平和公園に明確に看て取ることができる。

原爆資料館と平和公園における原爆の表現にはもうひとつ別の対立関係がある。資料館は，原爆投下をめぐる複雑な状況とその遺産を，起承転結が整い主題の一貫した理解しやすい形に還元している。ブルーマ（Ian Buruma）の指摘するように，展示でも映像でも，また出版物においても，原爆の物語は，無辜の意識から，例えば通りで遊ぶ子供たちや家族の日常的な朝の情景から，始まる[33]。閃光と空前

の苦難がこれに続く。西館の展示の最初の部分には子供の遺品が圧倒的に多く，親と子の絆が断ち切られたことを強調している。8時15分で止まった時計はまさに中心的主題を示している。原爆が落ち，資料館で上映される映画の語りの言うように，「時間が止まった」のである。止まった時計は原爆がもたらした断絶の象徴である。このとき，重要なことに，自然までが倒錯する。浄化と成長をもたらすと考えられる雨も，黒く肉体を蝕む。渇きも耐え難い。広島で後々までも水が被爆の大いなる象徴となった所以である。この苦痛は長く続く。放射線の恐怖は被爆者につきまとい，何年経っても絶えず原爆を思い出させる。

資料館の叙述は，これに続いて復興の勇気に移る。市民は混沌から秩序を回復すために集い，自然もこれに倣う。今後長い間草木も生えないとの危惧をよそに，草木は，そして雑草すら，頑強な生育を示して勝ち誇った。加えて，被爆者の活動意識の誕生と共通の利害の認識が苦難に意味を与える一助となり，平和運動と核兵器反対運動に活力を与えた。1954年ビキニ環礁における米国の核実験で被爆した漁船員の死が運動を刺激した。かくして，広島は原爆の苦難を生き残り，今日の繁栄を得たのである。

この叙述は力強くまた感動的ではあるが，主として肉体と生存に関わるものであり，政治に関わるものではない。このような認識における欠落と遺漏を指摘することは容易であるが，広島をこの種の手ごろな理解しやすい認識の枠組の中に位置づけることは一定の危険を孕むということを認識することのほうがより重要である。8月6日を繰り返し繰り返し同じ形で語ることから定式化が生まれ，定式化から通俗化が生まれる。ウルフ（Alan Wolfe）の言うように，「広島もヒットラーも，通俗商品に，ひいてはレトロ的懐古的消費形態に転化しうる，そして現実にそうなっている。ポストモダンの世界では，全面核戦争による人類の絶滅といった想像不可能な表現不可能な事柄すら，おむつの広告の隣に置かれる。それがもたらすのは無関心である」[34]。このような逆説的な陳腐化と通俗化に抗いつつ，心底からの原爆への思いを，行動に衝撃を与える原爆の理解を，生み出したいと願う広島の人々にとって，これは深刻な問題である。資料館が我々に想像不可能なことを想像させようとするとき，原爆を日常生活のひとこまとして心理的にも知的にも取り込んでしまうとき，資料館は原爆のもつ深刻さを削ぐことに手を貸すことになる。さ

らに悪いことに，原爆の問題を半ばドラマとして語ることは，原爆の悲劇を学ぶことの本質的な恐ろしさを減じてしまう不必要な感情的操作の要素を持ち込むことになる。

原爆被害をどう表現するかに関する論議は長い歴史をもつ。米国での議論は，1946年8月のハーシー（John Hersey）の『ヒロシマ』に対する批判に始まる。『ニューヨーカー』誌に発表されたハーシーのこの作品は，もっぱら個人に焦点を絞り，6人の被爆者の目を通して原爆を描いたものであった。原爆の被害に関する米国における最初の人間的で感受性豊かな報告としてほぼ全面的な称賛を受けはしたものの，『ヒロシマ』は，あまりにも理解しやすいとして『ニューヨークタイムズ』の批判を受けた。原爆被害という想像を絶するものを理解可能な語りの枠組の中に押し込め，出来事自体のもつ「恐ろしさ」にふたをしてしまったというのがその理由である。マッカーシー（Mary McCarthy）も，ハーシーは広島を「見慣れて害のないもの，結局のところありふれた」ものにしてしまったと述べている[35]。広島をあまりにも理解しやすくする危険，あまりにも解釈しやすくする危険は，被爆した作家や芸術家達が，そして原爆資料館があの日以来ずっと直面してきた問題である。

広島市内に散在する記念碑や慰霊碑も首尾一貫した記憶のパターンと理解を作り出すことに内在するこの緊張関係を映し出している。市内のモニュメントの位置も，原爆の意味付けにおける秩序への希求と秩序の不可能を認識する必要との間の動的な緊張を反映するものである。広島平和文化センター発行の『ヒロシマ平和読本（*Hiroshima Peace Reader*）』は，市内の59の記念碑を掲げている[36]。これらの記念碑は，しばしばに石碑の上に説明の銘板を載せたものすぎないが，それぞれの場所に固有のものであり，他の記念碑との関係を多少とも考慮して設置されているわけではない。どの記念碑にも，その場所にどのような建物があったのか，それが1945年8月6日に破壊されたのか，投下直後の救援活動に何らかの役割を果たしたのかを手短に記述している。説明文は名誉ある行為や著名人に言及することはない。実際，これらの記念碑はどちらかと言えばありふれた場所を記念していることのほうが多い。しかしながら，全体としてみると，これら記念碑は，記憶の焦点を日常生活に，つまり原爆の現実の犠牲者に，当てつづけているのである。その淡々

たる記述は，普通の市民の死は他の誰の死に劣らず悲劇であるという，原爆資料館に見られる思想を映し出している。そして個人は皆それぞれあの日を違った形で体験したのであり，各々の場所が記念に値するのであるという思想を裏打ちするものである。

しかし，このような絶えざる記念行為は，他方で意図せざる結果をもたらす。そして誇張の結果，聖化されたとも言うべき言語と儀式を生み出しかねない。碑文の幾つかを読めば，他の碑文は無視しても差し支えないのもそれゆえである。広島では，世界平和のメッセージが「記念館と，記念碑と，，仏塔と，泉水と，生徒と，伝道者と，公園と，慰霊碑と，展示品と，聖なる灯火と，慈悲深い神々と，平和の鐘と，平和の石碑と，平和の塚と，肖像と，シンボルとによって，徹底的に人の心にたたき込まれているので，あるイタリア人ジャーナリストの言葉を借りれば，平和公園の「鳩さえも平和に飽きている」のだ」とブルーマは評している。ブルーマは「死の厳粛ささえ，敬意や，儀式や，畏怖を誇張することで，些か滑稽なものになりかねない。感動を与えるはずのものが，感傷過多になり，愚かに見えてくる」と不満を語っている[37]。

ブルーマは自分の主張を誇張気味に語っているのかもしれないが，記念碑の遍在とブルーマの言う「感情過多の道徳」と声調は，広島の原爆被害の意味付けにおける最後の対立を浮き彫りにするものである。即ち，広島は学びの場ではないのである。広島は，広島平和文化センターのある出版物が述べるように，「世界平和のメッカ」と自称するのである。広島は，人々が祈りのために訪れ，核戦争という罪の赦しを乞うために訪れる場所なのである。かくして広島は見かけも響きもまた印象も宗教に似たものの中心地となるのである。この立場は批判的な再検討を許容しない。この立場は，ある種の無条件の仮定から出発する。中でも最も重要なのは，原爆被害は，比類のない残虐さのゆえに歴史を超越し，絶対に正当化できないという仮定である。それがもたらす結果は，非政治性であり，間断なく変容する現実を絶えず批判的に再検討するという同時代的営みを許さない硬直性である。

加えて，宗教的な意味づけのパターンを広島が確立することは，日本の右翼の戦争と原爆の意味付けにとっても有用である。宗教的なあるいは疑似宗教的な記念のモニュメントと形式を構築することに比べれば，広島への原爆投下に至る一連の状

況と事件を注意深く分析し説明することは，さして重要なことではないというのが原爆資料館のメッセージなのである。祈りが知的な理解と活動に勝利するのである。日本の他の博物館や記念の場所において軍人の死を宗教的崇拝の対象とすることは，広島の民間人の死に殉教の言辞を供えることからほんの一歩に過ぎない。政府の資金により保守的な遺族会のもとで運営されるはずの，東京の戦没者記念館をめぐる未解決の論争の犀利な分析の中で，ハモンドは記念館の推進者の意図の一つは，「聖なるものと俗なるものを融合させること，人々の歴史を宗教的崇拝行為のなかで日本軍人の死に対する慰霊と結合すること」であると指摘している[38]。広島におけるこの宗教的崇拝の強調が，広島が右翼と左翼の危うい合意の場であり続けることのできる理由のひとつでもあり，また広島が伝統的な狭い戦争観から抜け出せない理由でもある。

戦争と平和への新しいアプローチ

しかし，過去数年の間に，広島の平和記念公園と原爆資料館とは根本的に異なった形で日本の戦争期の歴史を扱う多くの博物館が生まれている。長崎，川崎，大阪，京都の博物館がそれである[39]。これらの博物館は，広島の資料館に比べより率直に教育と批判を意図した新しいアプローチを代表するものである。どの博物館も国際紛争の解決という難しい問題に確固たる解答を用意しているわけではないが，広島の資料館より広い平和の定義を提供していることは確かである。これらの博物館はまた，戦後に現われた戦争責任と戦争の勝利と敗北に関する硬直した定義にも挑戦している。軍国主義日本には批判的であるが，戦争と平和の歴史の理解に関しては率直な国際的視点を示している。これらの博物館は，細心の注意と一貫性をもって戦争中の日本の歴史が自ずから展開するに委ねるならば，その結果は歴史的な唯一性を主張し宗教的畏怖を感じさせる広島に劣らず強烈になりうることを認識している。どの博物館も日本の歴史記憶の喪失という神話を打破している。

長崎の原爆理解は広島とはまったく異なる。長崎の新しい原爆資料館は，1996年の4月に完成し，国際文化会館に代わって市の原爆被害展示の中心となった。広島の資料館と長崎の資料館の間には何の関係もない。長崎市は新しい建物の建設に56

億円の費用を投じた。この資料館は，原爆の惨禍の展示から始まって，8月9日に至る出来事を詳細に溯っていく。カトリック信徒の多いことが長崎の原爆の記憶に独自の色彩を与え，広島と明らかに異なるものにしている。そして，原爆投下後に見つかったイエス・キリストの彫像の頭部のような，意識的に宗教的殉教に関わる彫像をも生み出している[40]。資料館の最初の部屋は，原爆で破壊された浦上天主堂の壁のひとつを中心に据えている。アジアにおける日本軍の侵略的でしばしば残虐な行為の詳細を率直に描くセクションもある。これは，長崎の右翼勢力の怒りを買ったものである。展示の最後の部分では，長崎と日本と世界の平和運動の歴史が簡潔に取り上げられている。

東京の近くにある川崎市の平和博物館は1992年4月15日に開館した市営の博物館であり，開館以来年約三万人の入場者がある。この博物館は，展示品を陳列するのは一部屋だけで，他の部屋はすべてビデオや映画で構成されるという点で画期的である。しかも，映像の内容の同時代性は特筆に値する。この博物館の最初のセクションは戦争中の川崎を主題とする。川崎空襲の映像と1900年以降の日本の植民地主義政策を描いた映像がこの中心である。しかしこの博物館の射程は日本をはるかに超える。これに続いて，原子力の説明と武器と資源の浪費に関する展示がある。その他の映像は，生物化学兵器，南アのアパルトヘイトの終焉，エイズ，環境破壊，地雷といった広範なテーマを扱っている。これは確かに寄せ集めのパスティーシュではあるが，権力と階級格差というテーマがすべての映像に一貫して流れている。「ひとつの地球，ふたつの世界」というビデオは，豊かな国々，特に日本の映像と，戦争と貧困に打ちのめされた食料もきれいな水もない地域の映像とを並置してみせる。川崎の博物館が，トップレベルの外交的な平和維持の活動のみに焦点を当てることなく，困難な人道的活動や草の根の平和運動や社会正義運動を称えていることは注目に値する。

京都の立命館大学国際平和ミュージアムも1992年に開館した。年間約4万人の入場者を集めているが，世界で唯一の大学が運営する平和博物館である。安斎育郎館長は，平和ミュージアムが公的資金に依存せず大学の資源を利用できることは，この博物館が地域の平和博物館の「知的バックボーン」になりうる立場にあることを強調する[41]。安斎は新しい博物館の創設を支援するだけでなく日本の既存の7つの

平和博物館のネットワーク作りに深く関わっている。平和ミュージアムの戦争と平和に関する展示は，暴力と政府の抑圧に対する個人と集団の抵抗の役割を強調するものである。

この博物館の展示は「15年戦争」の詳細な叙述に始まり，植民地における日本の支配に対する抵抗をも強調しながら，中国と東南アジアへの日本の侵略を率直に語っている。戦争中の国内の国民生活のセクションでは国民が戦時の措置に抗議し，抵抗する困難に焦点を当てている。京都がもし原爆の標的になっていたとしたらどのような被害が出たであろうかという背筋の寒くなるようなシミュレーションもある。次の大きなセクションは，1945年以降の戦争の歴史を扱っており，米国のベトナムでの行為に厳しい批判が向けられている。最後のセクションは，平和維持のための国際的機構と枠組の発展を扱っており，見る者に暴力と非暴力の意味に関して刺激的な発想を提供する。パネルには，暴力とは，人間の潜在能力の十全な開花を阻む，偏見や，環境破壊や，経済的不平等を含むすべての物の謂であるというノルウェーの平和研究者ガルトゥング（Johan Galtung）の言葉が引用されている。

大阪城の敷地内にあるピース大阪は1989年に創立された。導入部のパネルは，日本は，15年戦争の戦場となったアジア・太平洋の人々に多大の苦難を与えたと述べ，この博物館は「公平で慎ましい反省」の場であると述べる。最初の階は大坂空襲の展示であり，隣組，学童疎開，国粋主義的教科書，民間の防衛組織などに言及して戦争の最後の４年間の国民生活にも及んでいる。長崎と川崎の博物館と同様，ピース大阪も日本国民の苦難と犠牲から始め，その後歴史を溯って戦争末期に至る歴史経過の叙述に移っている。

地階の展示は，この博物館を自己批判の厳しい他の博物館とすら区別するものである。このフロアの展示は1930年代の日本の対外膨張全を包括的に扱っており，軍部の行動をあからさまに批判している。「アジア大陸の侵略」と題されたパネルでは，白骨の写真や塀の支柱の上に置かれた生首の写真をはじめとして日本軍の中国における蛮行が展示されている。朝鮮併合とその後の多数の朝鮮人の徴用に関するセクションもあり，68万人の在日韓国・朝鮮人の人権に関して「日本はまだ多くの未解決の問題を抱えている」という一文で終わっている。この部屋の展示には，日

本人の犠牲となった人々によって書かれたのではないかと思わせるほどの自己告発がある。ここでは，戦争中の日本人の残虐行為と同義語となった地名，バターン，南京から泰緬鉄道に至る地名がすべて取り上げられている。沖縄，広島，長崎における日本人の犠牲の責任は日本政府に正面から向けられている。説明文は，このような犠牲は，見込みのない戦争を終わることを拒否した日本政府と神風攻撃とがもたらした結果であると述べている。最後の二部屋は，全体として国際協力をテーマとする1945年8月以後の国際政治に関する貼り込み展示であり，有名な「運命の時計」が指すその時々の時刻が支配している。しかし，米ソ会談から大阪万国博までの写真を見ていると，この博物館にとって平和とは何であるのかという疑問が残らざるを得ない。

以上紹介した平和博物館も完全ではない。例えば，1920年代の扱いを更に充実することも可能である。これらの博物館の大部分は，戦争の歴史を1920年代末の経済的沈滞から始め，満州事変に移り，日本のアジア侵略の詳細に移る。そして広島と同様，戦争の始まりは，たいていの場合人間の選択の結果の連鎖とは見なされていない。当時の日本の置かれた国際的地政学的状況と他の植民地列強との関係が更に詳しく語られるならさらに理解に資するはずである。

このような欠点にもかかわらず，これら新しい博物館は，戦争責任に区別を設けようとする点で特筆に価する。広島の原爆資料館は，米国政府と日本の軍国主義政府の選択と行動について語ろうとはせず，核兵器を，使用者と切り離して，真の悪とする。人間という行為主体を明示しない広島の叙述は，広島の死者達を，悲劇的だが不可避のものに変え，原因と結果の結びつきを切断してしまう。これと対照的に，立命館の博物館は，政府のトップレベルの政策という伝統的な議論を超えて，戦争に抵抗する一般市民とこれを抑圧する政府の役割を検討する。ピース大阪は，反国家的行為を政府に通報する義務をもっていた小さな組織である隣組の役割を明らかにすることにより，一般市民の共犯性の問題を提起している。かくして，見る者はフィールド（Norma Field）の言う「共同だが異なった責任」[42]とは何かに思いを致すのである。そして見る人は，おびえた19歳の兵隊は，上官とはまったく異なる選択肢に直面していたこと，その上官も戦争を引き延ばしている政府指導者とはまったく異なる選択肢に直面していたこと，このような責任のあり方は，当時生

まれていなかったために選択肢をまったく持たなかった人々のそれとも異なること，しかし生まれていなかった人々も何らかの形でこの遺産を引き継いでいること，を考えざるを得ないのである。戦争とその長期化の原因を仔細に検討するならば，戦争責任のこのような区別が可能になる。それゆえ，何人も，どのような集団も，15年間の死の全責任を負うことを強制されない。これは，現在の左右両派の狭い枠組みの中では許容されないことである。これらの博物館は，誤った政策の結果としての死と，不可避の死を区別することは，そのいずれからも意味を奪うことにはならないことを認識している。これらの博物館は，見学者が，異なった時間と空間に身を置いて考え，戦争と平和の理解には多様な観点が内在することをよりよく理解できるよう努めている。なかでも最も重要なことは，多くの異なる苦難を見て，それが不可避ではないこと，様々な原因の結果であること，そして責任は多くの異なったレベルで存在しうることをよりよく理解できるように努めているということである。

これら新しい平和博物館は，言わば未知の海を航海しているが，四つの特徴によって戦争と平和に関する伝統的博物館と区別される。第一に，日本の博物館は伝統的に学界からは高く評価されていない。そして，学芸員も，しばしば研究者としての専門的訓練を受けておらず，新しい挑戦的な戦争の解釈を打ち出す立場になかった。これらの博物館は，この点で優位な立場にある。第二に，これらの博物館は，過去の平和博物館がしてきたように戦争の惨禍を示すだけでなく，平和を具体的に描き出すという課題にも直面している。平和な日本における好ましい発展の例として繁栄と発展のイメージを展示している博物館もある。しかし，戦争における兵器のようによく知られかつ喚起力のある事物，即ち平和の物質的証拠を見出すという困難をいまだに克服できないでいる。第三に，新しい平和博物館は，政治的活動，特に草の根の平和運動を重視することによって，一般の人々が歴史の変化を生み出す力をもつこと，博物館批評家ウォーレス（Mike Wallace）の言う「歴史を知る歴史の作り手」[43]となることに対する期待を表明しているのである。最後に，これら新しい博物館は，勝利と敗北という二分法を避けて異なった人々に異なった形で起こった出来事の連鎖を提示し，今日の我々があることはどのような犠牲の結果であるかと問うことによって，戦争博物館の伝統的な用語法を打破することに成

功している。

日本の歴史的負債と遺産を再検討することは重要なことである。戦争を体験した世代は亡くなりつつあり，戦後支配的であった政治体制も同時に変わりつつある。憲法や，自衛隊の海外派遣や，日米安保条約に関する今日の議論は，いまだ決着のつかない戦争に関する議論に絶えず行き着く。ボズワースの言うように，歴史解釈の転換点は，より広い政治と社会の変化と分かちがたく結びついている。博物館を含む日本の公的機関は，過去とその現在との関係に関して歴史理解にもとづいた慎重な対話を促す努力ができるはずである。

戦争を扱う日本の博物館は，先の戦争は決着のついた歴史ではないということをまず最初に認めるべきである。異議のある一解釈を公式化して論争の超越を試みていることを示唆するような用語や展示形式は避けるべきである。博物館は，日本の過去半世紀のの教訓に関する絶えざる対話と開かれた議論に寄与することを目的とすべきである。限られた証拠を解釈しなければならない人間の書いた妥協の産物，それが展示であることを認めることは，博物館の建設と展示をめぐって紛糾しつづける論争の敷居を下げる効用があろう。エノラ・ゲイ展やいまだ実現していない東京の戦争メモリアルをめぐってかくも多大なエネルギーが傾注される理由のひとつは，博物館が戦争に関する議論に最終的な決着をつけるものであるという認識が存在するからである。博物館がそのようなことはできないと認めることは，博物館の重要性を毫も否定するものではない。平和博物館は，人々の関与と交流の場，政治と距離を置きつつなお政治を無視しない場，個人や集団に自らの関心を明確にかつ力強く表現すること促す場，過去に関する新たな形の合意を生み出す過程の一部となることができるのである。勿論，このようなことが一夜にして可能なわけではなく，博物館自体とも独立に，また日本の過去の戦争を再評価しようとする人々に対する右翼の激しい反応が生み出した威嚇の雰囲気とは別個に，進行する民主的エネルギーと政治的関与に依存したプロセスである。

日本の歴史は関わりを持つすべての人々によって再検討さるべきである。固定的で硬直した戦争に関する議論と，豊かで複雑で多様な個人の戦争の記憶の間の亀裂をこれ以上大きくしてはならない。平和博物館は，日本の戦争とその遺産に関するずっと続いてきた対話にこれまで関わることのできなかった人々を巻き込むことが

できるのである。

付記

本稿は戦後日本における戦争と原爆被害をめぐる議論と，戦争と平和の博物館を結びつけ，事態が外国からどう見えるかを示すことに主眼を置いている。主として英文資料に依拠したのもそれゆえである。使用した英文資料が，例えば井伏鱒二の『黒い雨』からの引用のように，元の日本語の資料や文献の英語への翻訳であることも少なくない。もともと日本語の原文がある資料については，その資料にある日本文をそのまま使用するのが，通常の翻訳の正道である。しかし，この論文では，このような場合には，『黒い雨』からの引用と原民喜の詩の表題など幾つかの場合を除き，日本語原資料を用いず，英語訳を日本語化した。従って原資料の日本語と本論文の日本語訳が異なる場合がある。戦争と原爆の問題が国外からどう見えるかを示すためには，この方法が好ましいと判断したからである。

註

1） Gluck (1993), 76
2） Cook and Cook (1992), 406
3） Dower (1993), 10
4） ラミス (Douglas Lummis) は，国際紛争の軍事的手段による解決に対する，戦争体験にもとづいたこのような広範な国民一般の懐疑の念を「日本の平和の常識」と呼ぶ。Lummis (1991) 参照。
5） Hicks (1997), 27
6） Hicks ibid 55, Hook (1996), 70
7） Hicks (1997) はこの過程を詳細に述べている。
8） Field (1993)
9） Hook (1996), 112-126
10) この博物館となおも続いている論争に関しては，Hammond (1997) を参照。
11) Reid (1995)
12) Field (1995) 及び油井 (1995), 23
13) Yui (1997), 67. 田中 (1997), 160も参照。

14) Hammond (1997), 109
15) 日本の左翼勢力は1950年代以来絶えることのない自滅的な内部対立に悩まされており，そのゆえに政治的危機に対して明確で一貫した対応が妨げられてきた。
16) Awaya (1991), 398
17) Okamoto (1997), 46
18) Chomsky (1969), 169
19) Anzai (1997)
20) Bosworth (1993), 183
21) Gluck (1993), 93
22) Hammond (19997), 117
23) Lapham (1997), 13
24) Bosworth (1993), 194
25) Hein and Selden (1997), 8
26) Hook (1996), 61
27) この経緯については，例えば宇吹 (1992), 19-23参照。
28) Yoneyama (1997) 及び Weiner (1997)
29) Dower (1995), 135
30) 井伏鱒二『黒い雨』，25。なお，原作の「わしゃあ情けない」の英訳は "It makes me sick" である（「胸が悪くなる」というほどの意味であろうか）。
31) Dower and Junkerman (1985), 124に引用。
32) Sturken (1997), 73
33) Buruma (1996), 21
34) Wolfe (1989), 217
35) Fenrich (1997), 127に引用。
36) Kosakai (1996), 53
37) Buruma (1996), 210
38) Hammond (1997), 109
39) このリストは網羅的なものではない。この論文では触れていないが，日本にはこのカテゴリーに当てはまる他の多くの博物館があり，その多くはごく新しいものである。ダフィー (Terence Duffy) は，これらのうちの幾つかを論じている。Duffy (1993) 参照。
40) これらの彫像の中にはアメリカ人の目からすると特に気に障るものもあり，実際戦後に検閲にかかったものも多かった。レーダー (George Roeder) が指摘したように，「アメリカ人と日本人の文化的距離を縮めてしまう」からであった。Roeder (1997), 91
41) 1997年12月23日安斎育郎氏とのインタビュー。
42) Field (1995), 414
43) Wallace (1995), 128

引用文献

Anzai, Ikuro (1997), *Sending Peace Message from Ritsumeikan University*, lecture deliverd June 6, 1997

Awaya, Kentaro (1991), "Emperor Showa's Accountability for War," *Japan Quarterly*, 38(4), October-December, 1991

Bosworth, R. J. B. (1993), *Explaining Auschwitz and Hiroshima: History Writing and the Second World War*, London: Routledge

Buruma, Ian (1996), *The Missionary and the Libertine*, Boston: Faber and Faber

Chomsky, Noam (1969), *American Power and New Mandarins*, New York: Vintage

Cook, Theodore and Haruyo Taya Cook (1992), *Japan at War and Peace: An Oral History*, New York: The New Press

Dower, John W. (1993), "Peace and Democracy in Two Systems," Gordon (ed.) (1993)

_____ (1995), "The Bombed: Hiroshima and Nagasaki in Japanese Memory," Hogan (ed.) (1995)

Dower, John W. and John Junkerman (eds.) (1985), *The Hiroshima Murals: The Art of Iri Maruki and Toshi Maruki*, New York: Kodansha International

Duffy, Terence (1993), "The Peace Meseum Concept," *Museum International*, XLV, 4-8

Field, Norma (1993), *In the Realm of a Dying Emperor*, New York: Vintage

_____ (1995), "The Stakes of Apology," *Japan Quarterly*, December 1995, 405-425

Fenrich, Lane (1997), "Mass Death in Miniature," Hein and Selden (eds.) (1997), 122-133

Gluck, Carol (1993), "The Past in the Present," Gordon (ed.) (1993).

Gordon, Andrew (ed.) (1993), *Postwar Japan as History*, Berkeley: University of California Press

Hammond, Ellen (1997), "Commemoration Controversies," Hein and Selden (eds.) (1997), 100-119

Hein, Laura and Mark Selden (eds.) (1997), *Living with the Bomb: American and Japanese Cultural Conflicts in the Nuclear Age*, Armonk, NY: M. E. Sharpe

Hicks, George (1997), *Japan's War Memories: Amnesia or Concealment ?* Brookfield: Ashgate

Hogan, Michael (ed.) (1995), *Hiroshima in Memory and History*, New York: Cambridge University Press

Hook, Glenn D. (1996), *Militarization and Demilitarization in Contemporary Japan*, London: Routledge

井伏鱒二 (1970) 『黒い雨』 (新潮文庫版), 東京：新潮社。英訳は Masuji Ibuse, translated by John Bester (1969), *Black Rain*, Palo Alto: Kodansha

Kosakai, Yoshiteru (1996), *Hiroshima Peace Reader*, Hiroshima: Hiroshima Peace Culture

Foundation
Lapham, Lewis (1997), "Magic Lanterns," *Harper's*, May 1997
Lummis, C. Douglas (1991), "Japan's Peace Common Sense," *Japan Quarterly*, July-September, 1991, 246-254
Okamoto, Mitsuo (1997), "The A-Bomb Dome as World Heritage," *Japan Quarterly*, 44(3), July-September 1997, 40-47
Reid, T. R. (1995), "Japan's Media Re-Fights, Revises WWII," *Washington Post*, August 14, 1995, A13
Roeder, George (1997), "Making Things Visible," Hein and Selden (eds.) (1997)
Sturken, Marita (1997), *Tangled Memories: The Vietnam War, the AIDS Epidemic, and the Politics of Remembering*, Berkeley: University of California Press
田中伸尚 (1997) 『「戦争の記憶」 その隠蔽の構造 国立戦争メモリアルを通して』, 東京：緑風出版
宇吹暁 (1992) 『平和記念式典の歩み』, 広島：広島平和文化センター
Wallace, Mike (1995), *Mickey Mouse History*, Philadelphia: Temple University Press
Weiner, Michael (1997), "The Representation of Absence and the Absence of Representation: Korean Victims of the Atomic Bomb," Michael Weiner (ed.) (1997), *Japan's Minorities: The Illusion of Homogeniety*, London: Routledge, 79-107
Wolfe, alan (1989), "Suicide and the Japanese Postmodern," Masao Miyoshi and H. D. Harootunian (eds.) (1989), *Postmodernism and Japan*, Durham: Duke University Press, 215-233
Yoneyama, Lisa (1997), "Memoery Matters," Hein and Selden (eds.) (1997), 202-231
油井大三郎 (1995) 『日米戦争観の相剋：摩擦の深層心理』, 東京：岩波書店
Yui, Daizaburo (1997), "Between Pearl Harbor/Nagasaki," Hein and Selden (eds.) (1997), 52-73